大学間競争を勝ち抜くために

福田勝幸 理事長

生 年 月 日：1944年1月11日（67歳）
学　　歴：1967年3月拓殖大学商学部貿易学科卒業
出　身　地：青森県

（会社勤務の後、1979年母校に戻り現在に至る）

1979年9月　拓殖大学 学生主事
1993年4月　学務部長
1998年4月　総務部長
2001年4月　事務局長
2003年6月　常務理事

6月に理事長に就任しました。就任にあたって私は、拓殖大学の良さを前面に出し、社会的評価を高めていくために四項目の指針を掲げました。

文京の教育環境を生かす

拓大の良さとは、「積極進取の気概とあらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格を具えた有為な人材の育成」という建学の精神です。私は『拓殖大学 百年史』の編纂にも携わっていますが、拓大の歴史を振り返ると、大学が設立された1900年から1945年頃の間に、大学の基礎が形成されています。明治から大正、昭和の前期にあたる約50年は、日本の社会が近代化し、その成果を近隣の国々に還元していった時代で、拓大はそのための人材育成という役割を担っていました。そして現代、特にアジアの近隣の国々が経済的な伸びを示す中、企業の海外進出も目覚ましい。私はこれを、拓大が100年前から担ってきた国際的に活躍できる人材の育成という役割を、再び生かすための好機と捉えています。

教育の環境づくりをバックアップするのが経営者の役割ですが、四項目の一つ目はキャンパスの都心回帰です。現在、八王子と文京に1、2年生と3、4年生が分かれて学んでいる商学部と政経学部について、できるだけ多くの学生が文京キャンパスで4年間通して密度濃く学べるようにします。1970年代、都心にあるほとんどの大学は進学率の伸びと大学設置基準の関係で郊外への移転を余儀なくされましたが、30年以上の時を経て、少子化や規制緩和で次々に都心回帰を果たしています。就職活動の開始時期が早まる中で、実質的な学びの時間を考慮すると、1年から4年まで同じキャンパスで一貫教育を行う方が、学びの中身も充実します。また文京キャンパスの立地条件を生かし、千葉や埼玉、茨城などの自宅から通学する学生の確保にもつなげたい。都心回帰による学生へのメリットは多大であると確信しています。

100周年を機に藤渡辰信総長と共に「21世紀の拓大をどう構築するか」と検討してきたルネサンス事業の一環の文京キャンパスの整備事業はこれから第3ステージに入ります。来年2月にはD館の研究室や学生食堂、学生控室を新館に移し、その後S館を解体し、図書館・教室棟を建設します。文京キャンパスは約20,000㎡の敷地がありますが、現在の基準ではその面積の約2.4倍の建物が建築可能です。

二つ目が地方からの学生のための学生寮建設です。八王子に大学が土地を提供し、民間会社に運営を委託する方式で、2食付き、月6万円ほどの個室を400室予定しており、来春の新入生から入寮できます。民間に委託とはいっても指導・監督は大学が行います。寮を中心にコミュニティーができ、勉強や運動部も含めたサークル活動により一層励んでほしいと願っています。

アジアで活躍できる人材を育てる

三番目はアジアを中心に活躍するグローバル人材の育成です。アジアの近隣諸国の発展がめざましい中で、それらの国の若者たちがどんどん日本に留学してきますが、日本の若者は逆に内向きになっているように見えます。拓大は30年前から海外提携校への研修制度を設けるなど他大学に先駆けた制度に積極的に取り組んできましたが、その内容も検証すべき時期にきています。拓大は海外に卒業生のネットワークも多くありますので、語学のみの研修で終わらせることなく、将来は海外でのインターンシップ等、海外企業への就職にもプラスになるような制度の構築も検討しなければと思っています。

スポーツを通し元気を発信する

四番目が体育の振興・強化により拓大の元気を発信しようというものです。スポーツは、甘えの時代といわれる現代において、若者が様々な面で自らを厳しく鍛え上げる数少ない場のひとつです。事実、体育部員の学生は全体の約10％の人数ですが、卒業後は就職先で高く評価され、さらに磨きをかけて良いポジションを勝ち取っている人が多いと聞いています。運動部の指導者は、陸上部にしても野球部にしても教育的にも優れている人が就任しています。もちろん大学広報としての効果も高い。例えば箱根駅伝に出場すると、全国に拓大生の頑張る姿が放送されます。それは学生自身にとっても誇らしく励みになることです。

復興を担い、自ら汗を流す

2011年3月11日は、日本の価値観と生活スタイルを大きく変える分岐点となりました。被災地に駆けつけ、泥だらけになってもプロジェクトを遂行する、そんな人材が社会にとっても企業にとっても財産であり、強味となりました。繰り返しになりますが、本来の拓殖大学の教育理念は「国内外どこに行っても一生懸命汗を流し、地域職場で信頼を勝ち取っていける人材を育てる」ことにあり、そのような学生を育て世に送り出すことが我々のミッションです。

私は1944年の生まれ。1歳で終戦となり、米軍の支配と食料難の時代を乗り越えて戦後復興の時代に育ってきた、いわば“復興の落とし子”の世代で、いろいろと鍛えられてきました。東日本も今は大変ですが、この試練に鍛えられより強くなると確信しています。日本が戦後の復興を遂げたように、今回の大震災からの復興を担う人材を育てられるかどうかが本学の教育力の見せ所だと思います。他大学との競争もありますが、歴史的に人材育成のノウハウを持っている本学の伝統を生かすことは現代社会に求められる人材を育てることにつながります。学生、教職員のすべてが力を発揮できる良い循環を作り上げること、それを私の使命にする所存です。